様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　４ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２５２７

研究課題名（和文）エトガル・ケレットから開くイスラエル/アメリカの現代ユダヤ文学の詩学

研究課題名（英文）Poetics of contemporary American/Israeli Jewish Fiction

研究代表者
秋元　孝文（Akimoto, Takafumi）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：７０３３０４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本課題の中心となるイスラエルの作家エトガル・ケレットにまつわる公開イベントを2018.2019年に甲南大学で開催した。2018年にはEtgar Keret: based on a True Storyを字幕を付したうえで上映、３人の日本作家を招いてのシンポジウムを開催。2019年にはケレット本人と妻で共同映画監督のシーラ・ゲフェンを招き、映像作為品の上映とケレットと西加奈子の対談を実施。同時に映像作品の映画祭も開催。関連してアメリカのユダヤ系作家のコール・クラウスについて学会シンポジウムで発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の読者にはあまりなじみのないイスラエルの作家エトガル・ケレットの作品を日本の読者に届く形で紹介し、フィクションが現代社会において持つ可能性を日本の作家たちとともに探求し、また彼の作品への日本の読者・観客の反応をデータとして集積し、研究の材料とすることができた。またアメリカのユダヤ系作家ニコール・クラウスについても学会で発表。異文化への理解を促すと同時に、ユダヤ的なものについてのアメリカとイスラエルでの類似と相違について考察する端緒となった。

研究成果の概要（英文）：I held 2 public events at Konan University in 2018 and 2019: screened a film Etgar Keret: based on a True Story with the subtitles I translated and had a symposium with 3 Japanese fiction writers in 2018, and invited Keret and his wife and co director Shira Geffen to Japan and had the screening of Middleman and the public talk between Keret and Kanako Nishi, along with the screening of some Keret films at theaters in 2019. I also read my paper on an American Jewish writer Nicole Krauss at an academic symposium in 2021.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：エトガル・ケレット　ニコール・クラウス　ユダヤ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

エトガル・ケレット (1967-)はイスラエルの新しい世代を代表する作家、映画監督であり、国民的な人気を誇るばかりでなく、国外でも翻訳によって 40 か国以上で読まれている。本課題研究代表者の専門領域であるアメリカにおいてもケレットは英訳で広く読まれ、最先端の現代文学を紹介する文芸誌 *McSweeney's* や *New Yorker* にも取り上げられ、*New York Times* に至っては彼を“genius”と呼ぶほどの高い評価を与え、Salman Rushdie, George Saunders, Miranda July ら英米新旧の錚々たる作家たちから評価の声が上がっている。最新短編集 *Suddenly, a Knock on the Door*(2012)がフランク・オコナー国際短編小説賞の最終候補になり、2016 年には「ユダヤ的価値によって人道主義的な仕事を残した」者に贈られる Charles Bronfman 賞を受けるなど受賞歴も多い。日本人になじみのある話題では、村上春樹が受賞し「壁と卵」と題されたスピーチを行った 2009 年のエルサレム賞の審査委員の一人がケレットであった。*Wristcutters*(2006), *$9.99*(2008)といった他の監督による映画化作品のほか、ケレット自身が妻の Shira Geffen と共同監督しカンヌ国際映画祭でカメラ・ドール（新人監督賞）を受賞した *Jellyfish*(2007)など映画の世界でも活躍が目覚ましい。

このような世界的評価にもかかわらず日本での紹介は、おそらくはヘブライ語やイスラエルというマイナーな文化への注目の低さもあって、他の国に比して遅れていた。かねてからケレット作品を英訳で読み注目していた私は 2012 年ごろから国内の出版社にケレット作品の翻訳出版を推薦し、また、来日時に本人と会って交友関係を築いて以来、英語で発表されたエッセイの翻訳と出版に尽力してきた。結果、2015 年に母袋夏生訳で短編集『突然ノックの音が』が、翌 2016 年に応募者の訳で英語エッセイの『あの素晴らしき七年』が新潮社より出版され、ようやく日本語でもケレット作品が読めるようになった。

とはいえ、この作家の世界的な影響力を考えれば日本での紹介はまだまだ端緒についたばかりであり、本研究課題はその日本での紹介を加速することと、ほぼ手つかずのままである国内でのケレット研究を促進し、また国際的なケレットの評価に日本からの視点を加えることを目標とした。

また、アメリカ文学研究における「ユダヤ系」という従来の枠組みは、アメリカ人作家であることを前提としてエスニックな集団に分けた分類であり、第二次世界大戦後に隆盛したベロー、マラマッド、ロスらの「ユダヤ系アメリカ文学」を語る際の言説が、旧大陸的民族的宗教的価値観と新天地アメリカの狭間での同化の問題や世代間の対立に重点を置いたものだったことに典型的にみられるように、アメリカという社会に対して新参者のマイノリティがいかに振る舞うかという「アメリカ」の物語を中心としたものだった。そしてそれはいまだにほかのエスニックマイノリティの文学を語る際のレトリックとして繰り返されている。

しかし、現代ユダヤ人作家自身にとっての認識は異なる。たとえばケレットと、親交の深い Jonathan Safran Foer(*Extremely Loud and Incredibly Close* [2005])や Nathan Englander (*What We Talk about When　We Talk about Anne Frank* (2012) との間には同じ祖先をもつ同胞としての共感があり、国籍よりも民族が国家横断的なアイデンティティの中心を成している。ケレットの両親はポーランドでのホロコーストの生存者であり、同じく Jonathan Safran Foer の母方の祖父もそうである。あるいは Englander は Israel で 5 年暮らした経験をもつ。そして「ディアスポラ」というユダヤ起源の歴史的経験の普遍化にも見られるように、現在アイデンティティじたいが流動的だと捉えな

おされている文化研究の時代では、国籍優先のアイデンティティのあり方は現実をとらえきれない。
　そうした背景を踏まえて本課題では、ケレットとの関わりからアメリカのユダヤ系作家の考察を行うことも視野に入れてきた。従来の「アメリカ文学」におけるユダヤ系作家はアメリカ文学の下位区分として扱われてきたが、本研究ではその枠組みをとらえ直し「ユダヤ系アメリカ人」ではなく、「イスラエル系ユダヤ人」と対比される「アメリカ系ユダヤ人」として、むしろ国境を越えて広がるユダヤ文学という大きな総体の一部とすることで新たな視点を開拓しようとしてきた。

２．研究の目的

　本研究課題はその日本でのエトガル・ケレット紹介を加速することと、ほぼ手つかずのままである国内でのケレット研究を促進し、また国際的なケレットの評価に日本からの視点を加えることを目的とした。また、同時代アメリカ人作家とイスラエル人作家ケレットとの共通点から現代ユダヤ文学の詩学を探求することも本研究の目的であった。

３．研究の方法

　ケレットに関しては、短編小説やエッセイ、映像化作品などの研究代表者による翻訳と出版、上映を通じて広く日本の読者、観客に彼の作品世界を紹介するほか、いくつかの公開イベントや映画祭を通じてさらなる紹介の機会と、読者鑑賞者からのフィードバックを得る機会を作ると同時に、公開イベントでの作家シンポジウム、日本の作家とケレットの対談などを通して、現代社会における文学が持つ意味について考察を深め、その現場を社会と共有する方法をとった。その成果の一部は雑誌掲載という方法で公開されている。
　また、アメリカのユダヤ系作家については、ケレットとの対話を通して知見を得ながら学会での研究発表を行った。
　ケレットやほかの現代アメリカユダヤ系作家のルーツであるポーランドやイスラエルへのリサーチも計画した

４．研究成果

　2017 年度末にはイスラエル大使館の招聘により、文化出版部門のイスラエル視察団に参加し、イスラ絵 r でのリサーチを行った。ヤド・バシェム　ホロコースト記念館や、イスラエルの出版関係者、文藝エージェント、エトガル・ケレット本人などとミーティングを行う。
　ケレットとのミーティングの様子は、「犬とエスキモー―エトガル・ケレット、日本からの視察団と語る」と題して、研究代表者の訳と構成で『新潮』2018 年 12 月号で発表。また、エトガル・ケレットと村上春樹について論じた論文“Etgar Keret, Haruki Murakami and World Literature: the Possibility of Translation.”をイスラエルのベン・グリオン大学から出版されている *BGU Review* にて発表。
　2018 年 11 月には甲南大学において公開文芸イベント「今、この世界で、物語を語ることの意味」を開催し、エトガル・ケレットを主人公としたハイブリッド・ドキュメンタリー映画『エトガル・ケレット ホントの話』を研究代表者の翻訳による字幕を付したうえで上映、温又柔、木村友祐、福永信の 3 名の日本作家を招いたシンポジウムを通して、ケレット作品の意義や文学の可能性について議論し、その様子を参加者と共有した。

2019年には、上記映画に加えてケレット原作、ゴラン・ドュキック監督の映画『リストカッターズ』を担当者の翻訳による字幕を付したもの、ケレット＆ゲフェン監督による映画『ジェリーフィッシュ』、『ミドルマン』の 4 作品を甲南大学ほかで上映し、エトガル・ケレット映画祭を開催。10 月にはケレット＆ゲフェンを甲南大学に招聘し、公開文芸イベント「おもしろさの向こう側：生を照らす物語の力」を開催。『ミドルマン』の上映とケレット＆ゲフェンによるトーク、ケレットと日本作家西加奈子対談を行った。西との対談の様子は『文藝』2020 年春号に代表者による訳、構成で発表。

2020 年にはコロナ禍の中発表されたケレットの短編「オリーブ、あるいは世界の終りのブルース」を Subsequence に、「外」を朝日新聞に代表者の翻訳で発表。この年より始まったコロナ禍により海外渡航が難しくなり、海外での調査が実質不可能となったが、2021 年にはアメリカのユダヤ系現代作家ニコール・クラウスのホロコースト 3 世ならではのホロコースト表象について「喪失を型から起こす」というタイトルで、日本アメリカ文学会関西支部大会シンポジウム「アメリカ文学における触覚的身体の変容――「接触」と「接続」をめぐって」で発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Takafumi Akimoto	４．巻 5
２．論文標題 Etgar Keret, Haruki Murakami and World Literature: the possibility of Translation	５．発行年 2018年
３．雑誌名 BGU Review	６．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takafumi Akimoto	４．巻 9
２．論文標題 The Seven Good Years in Japanese: Translating a Translation without the Original	５．発行年 2018年
３．雑誌名 CISMOR	６．最初と最後の頁 120-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 秋元孝文
２．発表標題 喪失を型から起こす―Great Houseに見るホロコースト3世の表現
３．学会等名 日本アメリカ文学会関西支部大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関